翻訳

「月の病」

―ルイージ・ピランデッロ『一年間の物語』より（二）―

尾河直哉

月の病[1]

バタは麦打ち場の中央にある積み藁のうえに屈み込んでいた。

妻のシドーラは敷居に座って戸口の柱に頭をもたせかけたまま薄目を開け、ときどき首をひねっては不安そうにバタのようすをうかがっている。それから、すさまじい暑さに気圧され、遙かに見える一筋の青い海に目を遣った。まるで、この暮れどきに、あの海から立った一陣の風が、切り株の突き立った今にも燃え上がりそうな剥き出しの大地を渡って、いとも軽々と自分のところまでやってくるのを待っているかのようだった。

脱穀の終わった麦打ち場に残された藁のうえでは、あまりにすさまじい暑さのため、大気が、真っ赤な炭火から吐き出される息のようにゆらめいていた。

バタは座った尻の下から藁しべを一本抜き取ると、その藁しべで、鋲を打った登山靴を力無く叩こうとした。無駄だった。藁しべは振り下ろそうとしたとたんに曲がってしまう。バタはなにかに没入するかのようにじっと押し黙っていた。

そよとも風のない燃えさかる陰鬱な大気に包まれ息を詰まらせながら、こうして執拗に繰り返される夫の無意味な行為を眺めているうち、シドーラの苛立ちは耐え難いほどまでに募っていた。というか、あの男がなにをしても、いやその姿を見るだけでもう苛立ちが込み上げきて、そのたびごと抑え込むのにひと苦労する。

結婚してわずか二十日しか経っていないのに、シドーラは早くも崩れてだめになりそうな自分を感じていた。自分の外側からも

内側からも、重苦しく耐え難い奇妙な空虚感に迫られている気がする。それに、こんな人里離れた古い「陋屋(モノ)」に連れて来られたのがつい最近のことだったなんて信じられなかった。馬小屋と住居が一緒くたになった「陋屋(モノ)」の周囲には、一本の木もなく、一服する木陰もない。この切り株だらけの荒れた土地が広がっているだけだ。

この「陋屋(モノ)」で、涙と嫌悪をやっとのことで抑え込みながら、シドーラが自分より二十歳年上の寡黙な男に身を任せてからまだわずか二十日しか経っていなかったが、男は見たところシドーラよりも深い悲しみに苛まれているようだった。

思い出してみれば、求婚があったことを伝える母親に、近所の女たちはこう言っていた。

「バタ？　ああ神様、あたしだったら大事な娘をあんなやつになんかやんないよ」

やっかみでそんなことを言っているに違いない。母親はそう信じ込んでいた。自分の基準からすればバタは裕福だったからである。そして、近所の女たちが娘に舞い降りてきた幸運を一緒に喜んでくれるどころか渋い顔をすればするほど、母親はこの結婚に執着した。バタのことを悪く思っているわけではなかったが、正直なところを言えば、良く思っているわけでもなかった。そもそも、こんな離れた土地に住んでいるバタのことなど知りようがない。雌ラバが二頭。雌がロバ一頭。番犬が一頭。こうした動物たちと一緒に独りで住むバタ自身が一匹の動物である。異様かつ獰猛な風采であることはいうまでもない。ときおり正気を失っているようにも見える。

母親が娘とこの男の結婚に執着した本当の理由、もっと重大な理由は別のところにあった。その理由もシドーラの記憶に蘇ってきた。いまとなっては遠い遠い昔のようで、さながら別の人生の話だったが、切り離されてはいても記憶は正確だった。目に見えるのは、笑うとカーネーションの二枚の花弁のように開くきりりとして真っ赤な瑞々しい唇。それを思い出たびにシドーラは体中の血管が震え、血が沸き立つ。それは従兄サーロの唇だった。サーロはシドーラに恋していたが、落ち着いた暮らしができず、くだらない連中とのつき合いから足を洗うことができなかったため、結局、母親はふたりの結婚を許すいかなる口実も見つけることができなかった。

たしかにサーロは最悪の夫だったかもしれない。でも、今こうして夫になった男はどうだというのか？　サーロが夫になっていたらたしかに気苦労はあっただろう。でも、この男にどうしようもなく抱く不安、嫌悪、恐怖と比べようがあるだろうか？

バタはやっと起き上がった。しかし、立ち上がったとたん、まるでめまいにでも襲われたように躯をよじった。自由を奪われた両脚が曲がる。両腕を空に突き上げ、やっとの思いで立ち上がる。喉の奥からは怒りに近いうめき声が洩れた。

シドーラは恐ろしくなって駆け寄ろうとしたが、バタはそれを両手で押し止めた。何か言おうとするが、唾があふれてきて止まらず、口が開けられない。しきりに唾を飲み込んで声を出そうとするが、喉の奥からしゃくり上がってくるおぞましい嗚咽を抑えきれなかった。しかも顔は血の気の退いた陰気な土気色で、暗く濁った目には、狂気の裏に子どものような恐怖心が看て取れる。バタはその無辺な恐怖心にたいする意識をまだ失っていなかった。相変わらず身振り手振りで、待ってくれ、怖がるな、近寄るなと伝えている。やっとのことで声を絞り出したが、それはもはやバタの声ではなかった。

「家に…入ってろ…いいか…心配するな…おれが戸を叩いても、揺すっても、引っ掻いても、叫んでも…心配するんじゃない…開けるんじゃないぞ…いいな…行け！　行けったら」

「ねえ、どうしたのよ？」シドーラはぞっとして叫びながら訊いた。

バタはふたたびうめき声を上げて、引きつったように激しく身を震わせた。まる四肢がばらばらになりそうだ。するとのたくるように腕を上げ、天を指して、呻きながら言った。

「月だ！」

事実、恐怖に襲われ「陋屋（モノ）」に走って戻ろうとするシドーラの目に、満月が垣間見えた。炎のように青く燃え上がったその巨大な月は、蒼白く光るクロッカ山から顔を見せたばかりだった。

心を固く閉ざし、為す術もなく募ってゆく震えに四肢がばらばらになるのをなんとか防ごうとするかのように、自分の躯をぎゅっと抱き締めたまま、シドーラもまた気が狂いそうな恐怖に呻き声をあげたが、その後まもなくして、外で身をよじっていた夫は戸口前までやってきて、月から送られてくる恐ろしい病に取り憑かれたまま、獣のような長い遠吠えを発したかと思うと鉤爪でも研ぐように戸口を引っ掻き、疲れた野獣が怒りを爆発させるときのように鼻息を荒げ、その戸口を引き剥がしてめちゃくちゃに破壊せんばかりの勢いで、今度は、まるで躯のなかに犬でも棲んでいるようにいくども遠吠えをしたかと思うと、また振り出しにもどって引っ掻いたり、鼻息を荒げたり、遠吠えをしたり、戸口に頭突や膝蹴りを喰らわしたりする。

「助けて！　助けて！」。こんな荒野のただかなかで自分の叫び声を聞いてくれる者などいないことは分かってながらも、シドーラは叫んだ。「助けて！　助けて！」。そう言いながら、両手で戸口を支えた。どんなにたくさんのつっかえ棒をしても、怒声とともにがむしゃらにいくどもぶつかってくるこの凶暴な力に耐えられなくなりそうで怖かった。

ああ、この人を殺すことができたら！　途方に暮れたシドーラは振り返ると、部屋になにか武器になるものはないか探そうとしかけた。だがそのとき、正面壁の高いところに開いている格子窓から再び月が見えた。静謐な曙光に浸されて今や凛々と冴え渡っ

ている。この光景を見ると、まるで月の病にとつぜん襲われ感染したかのように、シドーラは大きな叫び声を上げると意識を失ってあおむけに倒れた。

自分はなぜ倒れているんだろう。意識がもどったとき、まだぼうっとした頭でまず最初にシドーラが思ったのはそのことだった。戸口のつっかえ棒を見ているうちに記憶は戻ったが、外があまりに森閑としていることにたちまち恐怖を感じた。起きあがるとよろめきながら戸口のそばまで行き、耳を澄ませる。

なにも聞こえない。

こうして、全世界の謎めいた巨大な沈黙に押し潰されながら長いあいだ耳を傾けていた。そしてついに、近くからため息が聞こえてきたような気がした。死の苦しみから吐き出されたような深いため息だった。

シドーラはベッドに飛んでゆくと、下から木箱を引っ張り出し、それを開けると中からラシャのマントを取りだして戸口に戻り、また長い間耳をそばだてていたが、今度は黙ってつっかえ棒をひとつひとつ取ると、相変わらずおし黙ったまま差し金を持ち上げて閂を外し、扉を少し開け、わずかなすきまから地面をおずおずと見た。

バタはそこに居た。うつ伏せで顔はよだれにまみれ、躯は黒くむくんで、両腕が開かれている。横たわる姿はまるで死んだ獣のようだった。犬が前脚を伸ばしたまま傍らに座り、月の下で主人を守っている。

シドーラは息をひそめて外に出ると、またゆっくり戸口に戻り、怒ったような身振りで犬を制し、マントを小脇に抱えたまま慎重に抜き足差し足で田舎を逃げ出すと、月明かりを全身に浴びながら、まだ明け切らぬ夜を町へと向かった。

町の母親の家に着いたのは夜明け少し前で、母親はまだ起きたばかりだった。狭い路地の突き当たりにある茅屋は洞穴のように暗く、オイルランプの光が室内をぼんやり照らし出している。気が動転したまま息を切らして部屋に駆け込むと、シドーラは自分ひとりで部屋を塞いでしまったような気がした。

こんな時間に、こんなありさまでやってきた娘を見て母親が叫び声を上げたため、近所の女たちがオイルランプを手に駆けつけた。

シドーラは大泣きを始め、泣きながら髪の毛をかきむしり、母親とそこに来た女たちをまえに、どれほど大変なことが自分の身に起こったか、どれほどの恐怖を味わったかもっとよくわかってもらおうと、とても言葉にできないという仕草をした。

「月の病なの！　月の病なのよ！」

シドーラの話を聞いているうちに、迷信深い女たちの躯には、この暗い病気に対する恐怖が忍び込んできた。

ああ、かわいそうに、この娘！　ここの女たちも言ってたではないか。あれは「まとも」な男じゃない、なにか重大な欠陥を

隠しているにちがいない、だれも自分の可愛い娘をあんな男にやるつもりはないって。吠えてたって？　狼みたいな遠吠えをしてたって？　戸口を引っ掻いてたって？　イエス様、なんて恐ろしいことを！　かわいそうに、あの娘、なぜ死なずにすんだのかしら？

意気阻喪して椅子にへたり込み、茫然自失のていで腕と頭を揺すりながら、母親は部屋の片隅でうめいた。

「ああ娘よ！　わたしの娘よ！　かわいそうに、あんた、こんなに酷いことされちまって！」

夕刻ごろ、馬具をつけた二頭の雌ラバの端綱を引きながらバタが路地に現れた。まだ蒼白い顔は浮腫んでいて、気落ちし、しょげ返り、狼狽した様子だった。

八月の太陽によって竈のように熱せられ、石灰の照り返しで目も開けられないほど眩しいその路地の砂利に脚を取られながらよたよた歩いてくる雌ラバを目にすると、女たちはみな、恐怖に身をすくませ息を詰まらせて、椅子を持ったまま慌てて自分の茅屋に戻ると、戸口から顔だけ出して外のようすを伺い、お互いに目配せしあった。

シドーラの母親は全身に怒りを漲らせた権高な姿を戸口に見せ、大声で叫び始めた。

「帰っておくれよ、このできそこない！　ずうずうしくもまたあたしの前に姿見せようってのかい？　ここから出てっておくれ！　とっとと！　この裏切り野郎の悪党！　ここから出てけってんだ！　娘を台無しにしてくれやがって！　行け、さっさと！」

こうして母親がしばらく大声で怒鳴り散らしているあいだも、シドーラは部屋のなかに引きこもって、あたしを守ってくれ、あの人をここに入れないでくれと泣きながら母親に哀願していた。

バタは頭を垂れて威嚇と罵倒を聞いた。その言葉はバタの胸に堪えた。悪いのは俺だ。病気のことを隠していたのだから。でも、隠していたのは、もし自分から先に打ち明けたところで、女たちはだれひとり自分の言うことを聞いてくれないと思ったからである。こうして自分の罪を贖うことになるのは当然の報いだった。

バタは目を閉じ、頭を苦しげに揺らしながら、その場を一歩も動かなかった。と、義母がバタの鼻先で戸をぴしゃりと閉めると門を差した。バタは閉じられた戸口の前でもうしばらく頭を垂れていたが、やがて後ろを振り返ると、周囲の茅屋の戸口から周章狼狽した多くの目がこちらを窺っていることに気づいた。

これらの目が消沈した男の顔に涙を認めると狼狽は哀れみに変わった。

いちばん勇気のある近所のおばさんがまずバタの前に椅子を置き、続いて二三人が外に出てきてバタを取り巻いた。すると、バタは黙ったまま首を振って感謝を伝え、自らの不幸をぽつりぽつりと語り始めた。こんな話だった。母が若いとき、麦打ちに行っ

て夜空の下、麦打ち場で眠ってしまい、赤ん坊をひとばんじゅう月に晒してしまった。なにも知らない赤ん坊は、かわいそうに、ひと晩じゅうお腹を出したまま、目をあちこちに彷徨わせながら美しい月と戯れ、小さな手足をばたつかせていた。そして月はその子を「魔法にかけて」しまったのである。だが、魔法はその子のなかで何年も眠り、つい最近になってそれが目覚めた。以来、満月になるたびに、その病に襲われている。ただ、病に襲われるのは自分だけで、他人は注意して自分の身を守っていれば問題ない。それに身を守ることは十分に可能だ。病に襲われる時期は決まっているし、やって来ることが体感で分かるから、予告することもできる。それに、一晩だけのことでそれ以上は続かない。妻にもっと勇気があればよいのだが、そうでない以上、満月になるたび母親が住む実家に妻がやってくるか、母親が「陋屋(モノ)」まで来て妻に付き添うかする、という手もありうるだろう。

ちょうどここまで喋ったときだった。「だれ？　あたしのかあさんのこと？」。それまで戸口に隠れて盗み聞きしていたシドーラが、突然扉を大きく開け放ち、怒りで顔を紅潮させながら凶暴な眼差しで叫んだ。「あんた、おかしいよ！　あたしのかあさんまで恐れ死にさせよってのか」

このとき、その母親も外に出てきて娘を肘で押しのけると、大人しく家のなかに入って黙っているよう命じた。母親は、今ではすっかり哀れみ深くなった女たちの集まりに近づいて、ひそひそ話をしたかと思うと、次はバタと差しで密談している。

シドーラは戸口のところで悲しみと苛立ちに苛まれながら母親と夫の仕草を見守った。そして、このふたりがとても熱心になにやら約束を交わし、それを受け入れた母親が明らかに嬉しそうな表情をしたので、こう喚いた。

「だめだって！　約束は忘れて！　もうふたりで決めちゃったの？　だめ。だめだめ。決めんのはあたしなんだから」

近所の女たちは切迫した身振りで、話し合いが終わるまでだまっていろと伝えた。やっとバタが義母に別れの挨拶をし、二頭の雌ラバのうちの一頭を預けると、親切にしてくれた近所の女たちに礼を言い、もう一頭の雌ラバの端綱を引いて立ち去った。

「黙ってんだよ、バカ！」と母親は家に入るとすぐに小声で言った。「今度満月になったら、あたしがあっちに行くからね、サーロと一緒に…」

「サーロと？　あの人がそう言ったの？」

「あたしだよ。おまえは黙ってりゃいいんだ。サーロと行くから」

そして、薄笑いを隠すために目を伏せ、頭からかぶり顎の下で結んだハンカチの隅で歯の抜けた口を拭うふりをしてからこう言い添えた。

「うちの親戚に男っていや、あれしかいないだろ？　あたしたちの助けや支えになってくれるなあ、あれだけだ。おまえは黙っ

てなよ！」

こうして翌朝、夜も白々明けるころ、シドーラは夫が置いていった例のもう一匹の雌ラバに乗って田舎に戻った。

次の満月の日が来るまでの二十九日間、シドーラはそのこと以外なにも考えられなかった。八月の月が次第に痩せて、月の出が次第に遅くなるところを見ると、月が欠けるのを早めたくなった。次いで月の見えない晩がいく日が続くと、今度は若く柔らかい月が、まだ薄明かりの残る夜空にほっそりとした姿を再び見せ、今度は次第に満ちてゆく。

「怖がらなくていい」。バタが、しじゅう月を見つめているシドーラにいう。「まだまだだから！　やっかいなのは、月の角が取れたときだ」

曖昧な微笑とともに発されるこの言葉を聞くたび、シドーラの躯は凍り付き、ぎょっとして夫の顔を見つめるのだった。

あれほど待ち望み、またあれほど恐れていた晩がついにやってきた。母親は、月の出る二時間前に従兄のサーロとともに馬で到着した。

バタは前回同様、麦打ち場でじっと屈み込み、挨拶のために顔を上げようとすらしない。

全身ガタガタと震えているシドーラは従兄と母親に何も言わないよう合図で伝え、「陋屋（モノ）」のなかに入ってもらった。母親は入るとすぐに真っ暗な部屋のなかを詮索し始めた。家畜を容れる大きな部屋の脇には古い工具、つっかえ棒、木製の鞍、籠、振り分け背負い袋が積み上げられている。

「あんたは男だ」と母親はサーロに言うと、娘にはこう言った。「そして、おまえはもう事情を知ってる。でもあたしゃ年寄りで、あんたらよりずっと恐がりだ。だからここに隠ってひとりで静かにじっとしてるからね。ここにしっかり隠ってるから。あいつが外で狼になっても」。

三人は屋外に出て、しばらく「陋屋（モノ）」の前でお喋りをした。影が野山に長く伸びるにつれてシドーラの投げかける眼差しはますます熱っぽく、挑発的になってゆく。だが反対に、いつものように快活で、陽気で、朗らかだったサーロの顔からは血の気が退いてゆき、唇のうえでは笑いが凍り付き、舌は乾いていった。まるで針の筵に座っているようで、尻が落ち着かず、唾を飲み込むのも一苦労。そして、病に襲われるのを待つあの男を横目で見ようとときおり視線をのばすが、クロッカの山頂から月がその恐ろしい顔を現すところを見たくて、ついでに首までのばしていた。

「まだなんの気配もないな」とふたりの女に言う。

シドーラは平気よと言わんばかりに快活な受け答えをし、笑いながらサーロに挑発的な眼差しを送っている。

今や厚かましいほどまでのこの眼差しに、サーロは、あそこで屈み込んで待る男よりも深い恐怖と戦慄を覚えた。

そしてバタが病を告げるうめき声を発し、すぐに家の中に入っ

て戸を閉めるよう手ぶりで三人に伝えたとき、「陋屋（モノ）」のなかの雄羊にまっさきに飛びついたのはサーロだった。母親が肩を落とし物置部屋に入ってゆく一方で、サーロがこうして大慌てでつっかえ棒を何本も立てかけようとしていることにがっかりし苛立ったシドーラは、皮肉な口調でサーロに繰り返し言った。

「そんなに慌てないで…怖がることなんかないんだから…ねえ、なんでもないでしょ」

なんでもない？　これがなんでもないっていうのか？　あの夫が遠吠えを始めたばかりで、戸を蹴飛ばし、涎を垂らして戸口を引っ掻き始めたばかりで、もうサーロは恐怖に前髪を逆立て、冷や汗をびっしょりかいて、背中をわななかせ、目の玉も飛びでんばかり風情で小枝のように震えていた。なんでもないだって？　主なる神よ！　主なる神よ！　いったいなんなんだ？　あの女、おかしいんじゃないのか？　夫が外であんな嵐にひっかき回されているってのに、あいつときたら、笑いながらベッドに腰掛け、腕組みして片脚を揺すりながらおれを呼びやがる。

「サーロ！　サーロ！」

ああ、それで？　怒り、憤慨したサーロは老女がいる物置部屋にいきなり飛び込むと、腕をひっつかみ、外に引っ張り出してベッドに抛り出すと娘のとなりに座らせた。

「ここに座れ。この女、狂ってるぞ！」と大声で怒鳴った。

そして戸口の方へ後ずさりしながら、サーロもまた、正面の壁の高いところに穿たれた小窓の格子から見える月に気づいた。その月は、壁の向こう側で夫に病を与え、壁のこちら側で、復讐に失敗した妻を満足げに、そして意地悪そうに嘲笑しているように見えた。

注

(1) 初出は一九一三年七月二二日付『コッリエーレ・デッラ・デーラ』紙。初出時のタイトルは「満月」（*Quintadecima*）。ダヴィアーニ兄弟監督の『カオス・シチリア物語』の第二エピソード「月の病い」はこれをベースにしている。映画は、原作のストーリーをほぼ踏襲しているが、主に①シドーラとサーロの関係がより詳しく描かれている点、②シドーラの母親がより優しい性格に描かれている点、③母親の近所の女たちがほとんど出てこない点、④いったん雨が降って、満月の出が阻まれ、それによってバタがシドーラとサーロの不義を疑わせる場面を垣間見てしまう点、⑤最後にシドーラがバタの介抱をし、その様子を見たサーロが納得して母親と帰ってゆくという場面が挿入されている点で異なっている。原作では、サーロがシドーラにたいして欲望を抱いているかどうかは不明だし、家に連れて来られて初めてサーロはシドーラの欲望を知らされているようだ。またサーロはシドーラにたいする欲望にほとんど獣のような狂気を感じている。一方、映画では、サーロはシドーラに欲望を抱いており、満月の晩の一夜を待ちきれない思いでいるが、いざバタの呻き声を耳にすると、恐怖ばかりでなく、シドーラの夫にたいする同情から彼女を抱けなくなってしまう。⑤の

場面と相俟って、映画が原作より「自然」で「人間愛に満ちた」後味の良いストーリーになっている。一方原作は、バタの獣的な狂気はいうにおよばず、苦しむ夫に同情のそぶりもせずみずからの欲望を剥き出しにするシドーラや、密かに共謀してそれを後押しする母親の狂気をサーロの怒りが炙りだしており、獣的な狂気の主題がより強く前景に押し出されているという印象がある。

底本には*Male di luna* in Luigi Pirandello, *Novelle per un anno*, a cura di Mario Costanzo, Introduzione di Giovanni Macchia, volume secondo, tomo I, Arnoldo Mondadori; Editore S.p.A., Milano, V edizione I Meridiani febbraio 1996を使用した。